

□ 次の各問いに答えなさい。

問一 次の漢字の成り立ちにあてはまるものを一つ選びなさい。

意味を表す文字と音を表す文字を組み合わせでできた漢字

ア、鳴 イ、河 ウ、畑 エ、岩

問二 次の――線の漢字の読みを書きなさい。

医師に勧められて湯治に行った

問三 次の熟語の対義語として最も適切なものを選びなさい。

理想

ア、毎日 イ、限定 ウ、現実 エ、想像

問四 次の(ア)・(イ)にそれぞれ漢字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

前(ア)未(イ)

問五 次の文は「鏡」という漢字を漢和辞典で探すときの方法をまとめたものである。解答欄の□にあてはまる言葉を書きなさい。

「鏡」の音は□1であるので、音訓さくいんで引けるが、部首さくいんでは□2のところを引けばよい。総画数は□3画となる。

問六 次の――線の文中での働きとして最も適切なものを選びなさい。

ねえ、今年の夏休みは上板橋で過ごしましょう。

ア、独立語と同じ働き イ、主語と同じ働き

ウ、述語と同じ働き エ、修飾語と同じ働き

問七 次の――線のかなづかいで、まちがっているものを一つ選びなさい。

ア、兄からもらったこの鉛筆は短すぎて書きづらい

イ、毎日一ページずつ漢字のテキストを勉強している

ウ、もみじおろしがこの料理を一層引き立てている

エ、しかたがないので今日は一日中家でじっとしていた

問八 次の――線の言葉の使い方として適切でないものを一つ選びなさい。

ア、情けは人のためならずという言葉があるように、子供を甘やかし過ぎるのはよくない。

イ、連休を利用して気の置けない友人たちと旅行に行き、心身ともにリフレッシュできた。

ウ、ここ最近あの会社は、流れにさおさず形で急成長を遂げている。

エ、あまりのことにあっけにとられてしまい、一歩も動けなかった。

問九 次の□に入ることわざとして最も適切なものを選びなさい。

あの秘密を彼までが知っているなんて、まさに□だ。

ア、言わぬが花

イ、頭隠して尻隠さず

ウ、壁に耳あり障子に目あり

エ、人のうわさも七十五日

問十 次の百人一首の□に入る言葉として最も適切なものを選びなさい。

山里は□ぞさびしさまさりける 人目も草もかれぬと思へば

源宗于朝臣

ア、春

イ、夏

ウ、秋

エ、冬

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いろいろな動物を手術していると、「この道具、使いにくいな」と思うことがある。獣医療用の道具は、もともと人間医療用の流用だ。動物用というのはとても少ない。だから人間より小さい動物に使う場合、何かと不自由をする。また、手術の道具も基本的に人間用で、ドイツ製がいいと言われている。でも海外で作られた手術器具の多くは、大きな外国人の手に合うように作られているので、小柄な日本人には持ちにくいことがある。こういうとき多くの先生は、その器具をうまく使えないのは自分の手術の腕が悪いのだと考えて、なんとか使いこなそうと頑張ってしまう。

僕は不器用だけれど、「自分が下手だから」とはあまり考えない。「これがもう少し小さかったら」「ここがもう少し曲がっていたら使いやすいのにな」と思う。そういつたアイディアをためておいて、医療機械の業者の人と相談してより使いやすいものを開発してもらうことがある。業者の人もある程度売れることが見込めれば商品化してくれる。

この間は、透明のドレープを作った。ドレープというのは、医療ドラマとかで見たことがあるかもしれないが、手術のときに、手術する以外の部分を隠す緑や青色をした布だ。

その布をかぶせることで、一つ困ったことが起きていた。それは、小さな動物ではドレープをかけてしまうと、麻酔中、呼吸をしているかどうかわからなくなってしまうことだ。人間やイヌやネコの場合、手術中は気管にチューブを入れて麻酔や呼吸を管理する。気管チューブを入れると呼吸管理は機械がやってくれるので、呼吸モニター機械の出す音を頼りに手術をする部分に集中すればいい。でも小動物は小さすぎて気管チューブを入れられないので、機械で呼吸を管理できない。そのため、自発呼吸と言っ

て、自らの呼吸に頼らなければならなくなる。

これまで、僕が手術をしている隣で、看護師が動物の呼吸の動きでドレープがかすかに上下するのをじつと凝視したり、ドレープを少しめくって直接胸の動きを確認していた。

気管チューブが入っていない動物で麻酔中に呼吸が止まるということは、即、命に関わる。小動物の手術のときは、いつにも増して緊迫したムードが手術室に充満する。呼吸が止まったように見えると、看護師から「ちよっと待ってください」と声がかかる。そしてドレープをめくり、動いているのが確認できると、「あ、大丈夫です！」いつもそんな感じだった。

A、ドレープをかぶせていても中が見えるように「ドレープを透明にしたらいんじゃない？」という話になり、業者の人にお願した。手術道具は、高圧蒸気滅菌といって一二℃の蒸気に四〇分くらいさらすので、普通のビニール等では溶けてしまう。また、先の尖った鉗子（刃のない鉗子）のような形をした金属製の手術器具で挟んだり、繰り返し使うので洗濯機で洗える丈夫さも必要だ。その条件を満たす特殊なシリコンで透明のドレープを作ってもらった。

③ 手前味噌だが、これがなかなかいい。ドレープを通じて動物の胸が動いているのが見えて安心して手術ができるようになった。

道具のことに限らず、手術でも診察でも「ちよつとした違和感」があったとき、僕はその気持ちを大事にするようにしている。手術で「こういう角度でやっていて、どうもやりにくい」というとき、「やりにくい」と思いつながら続けるのではなく、少し角度を変えて見てみたり、道具の持ち方を変えてみたりしてやりやすい方法はないかと工夫する。

当たり前と言えば当たり前なのだが、自分のやり方や既存のものに慣れ

てしまうと、「やりにくいな」と思っても、その状況をなかなか変えることができない。これは、子どもが体を斜めにしたまま字を書いて、「うまく書けない」と言うのに似ている。体を少し起こしてみれば、ずっと書きやすくなる。でも斜めに書く習慣がついてしまっていると、そのことに気づけない。だから、うまくいかないことに違和感を覚えて、自分を変えてゆくというような気持ちが必要だと思う。

なぜそう思うようになったか考えてみると、僕は小さいときから動物をたくさん飼っていた。動物を飼うという趣味の世界は、学校の勉強とは全然違う。教育の過程にいとたくさん覚えるべきことがあり、それらをちゃんと学んでいけば、一つの答えに行きつく。でも、飼育書もないような珍しい動物を飼う方法は誰もその答えを知らない。だから自分の頭でいろいろ考えなければならない。中でも、大好きでいろいろなカエルを飼っていたとき、それらのカエルをどうしたら生かせるのか、さまざまな方法を⑤ コウアンした。

B、フクラガエルというアフリカの小さなカエルがいる。カエルと言えば湿らせて飼うのが常識なので、普通のカエルを飼うように湿らせたミズゴケで飼っていたら、一週間ほどで死んでしまった。なんで死んでしまったのだろうという調べてみると、フクラガエルはアフリカの乾燥したところに棲んでいるということがわかった。そこでホームセンターに行き、アフリカにありそうな土を選んで買ってきて、その土を湿らせずに乾燥したままの状態にしてカエルを入れた。するとそのカエルはずっと生き続けた。初めて日本にユニウされたときはそんな情報はなかったのだ。

それは日本で初めて、フクラガエルの長期飼育に成功した例だと思う。その頃僕は大学四年生で、爬虫類専門誌に飼育方法の記事を書いた。そ

の後、このカエルは乾燥したバサバサの土の上で飼うことが「常識」になった。

多くの人は、⑦ 既存のものの方がすばらしくて、⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷

いた。これも最初は小さな違和感だった。あまり見かけない奇妙な皮膚病がトカゲの集団で流行した。「なんだよこれ」と思い、海外の論文を調べてみたら、ウイルス感染が疑われた。カエルツボカビを同定してくれた病理学の先生に相談したら、その先生でさえ「ウイルスで、こんな病変は出ないでしょう」と言う。でも、いちおう調べて見てもええせんかとお願ひしたところ、新しいウイルスが検出されたのだ。同時にある細菌も見つかった。つまりウイルスと細菌の混合感染で、それは初の報告となった。今後こういう皮膚病変が出たときは、両方を調べるべきだろうと論文で結論付けた。

こういう「新しい発見」は、論文を書いて投稿し、その知見が科学の世界で吟味され、それらの仮説が生き残るとやがて教科書に引用されるようになる。科学の世界というのはそういう構図になっている。

だから、習ってきたことと違うことや、習ってきたことがうまくいかないというところに「何だろう？」と思う気持ちは大切だ。いまは情報化社会で、インターネットを見れば何でも答えがあるように思う。でも現場の本当の最先端のことは、ネットには絶対に出ていない。ときには自分で「答え」を見つけていかなければならないこともある。

生物学をやりたいとか、生き物を扱う仕事をやりたいという人は、「生き物はまだまだわからないことだらけ」ということを知っておいたほうがいい。逆に言えば、生き物と向き合う仕事というのは、そんなふうに新しいものを見つけられる喜びの多い仕事でもあるのだ。

(田向健一『生き物と向き合う仕事』)

問三 — 線 A・B に入る最も適切な言葉をそれぞれ選びなさい。

ア、つまり イ、たとえば ウ、また
エ、しかし オ、そこで

問四 — 線③「手前味噌」の意味として最も適切なものを選びなさい。

ア、自慢 イ、不公平 ウ、身勝手 エ、平凡

問五 — 線④「うまくいかないことに違和感を覚えて、自分を変えてゆく」の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア、うまくいかない原因は自分にあるのだと自覚し、自身の技能を高めて成長していくということ。
イ、うまくいかないことに対して自分にはできないと割りきり、気持ちを前向きにすること。
ウ、うまくいかないことを続けるのではなく、他に夢中になれるものを見つかるべきだということ。
エ、うまくいかないことに気づき、それに対して自ら様々な工夫を試みて改善させていくということ。

問六 — 線⑤「コウアン」・⑥「ユニユウ」を漢字に直しなさい。

問七 — 線⑦「既存のもの」・⑧「自分の考え」とは、フクラガエルの例の中では何に当てはまるか。それぞれ簡潔に答えなさい。

問一 — 線①「自分が下手だから」とはあまり考えない。」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、不器用でも前向きな気持ちで取り組もうと心がけているから
イ、他の人が思いつかないアイデアを持っていると考えるから
ウ、器具をうまく使えない原因は自分よりも器具にあると考えるから
エ、獣医師としての自分の技術に揺るぎない自信を持っているから

問二 — 線②「いつもそんな感じ」の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア、小動物には気管チューブを入れられないため、動物自らの呼吸に頼らなければならないということ。
イ、小動物が呼吸しているかを確認しながら作業するため、安心して手術ができないということ。
ウ、看護師が小動物の呼吸確認につきつきになるため、人手が足りなくなってしまうということ。
エ、小動物の手術は常に大型動物のものよりも困難なため、緊迫したムードが漂っているということ。

問八 — 線⑨「そこ」が示す言葉を文中から十五字で抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問九 本文の内容として最も適切なものを選びなさい。

ア、科学の世界では、功績を残している人の発言が常識とみなされる。したがって、生き物と向き合う仕事をする人は、絶えず論文を書き続け、学会で認められなければならない。
イ、生物学では、既存の考え方でも誤っているものが多々ある。したがって、生き物と向き合う仕事をする人は、既存の考え方にとらわれず、何事も自己流でこなしていく必要がある。
ウ、獣医療用の道具は日本ではまだ使いやすいものが多くない。したがって、生き物と向き合う仕事をする人は、どんな道具でも使いこなせるように技能を高めなければならない。
エ、生き物には、まだ私たちが発見していないことがたくさんある。したがって、生き物と向き合う仕事をする人は、自分で感じた違和感を大切にし、それを追究していく必要がある。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ハッチ（千晴）とマールウ（鞠絵）は十一歳のふたごの女の子。小説家の母親と三人で長野県の山奥にある親戚の別荘で暮らしている。

最後に残った段ボールにカッターを入れるなり、マールウとわたしはキヤーキヤー歓声をあげながら、夢中でそこに入っている品物をお互いの中からだにあてていった。

首元にフリルがついたTシャツ、ギンガムチェックの半そでブラウス、お花の刺繍つきのデニムのスカート、色ちがいのリボンが巻いてある麦わら帽子、貝殻の飾りがついたヘアゴム、バイナツプル形のビニールバッグ、水玉のワンピース……ほんとにどれもみんな、A するほどかわい
い！ そのうえなにがすごいかわいという、ママが選ぶ洋服は色あいてもサイズも気味わるいくらい、わたしたちにぴったりなのだ。

「ママ、たしかに気絶しそうだよ！」

「そうでしょう、ママも気絶しそう！」

言いながら、ママはさつそくバジヤマを脱いで下着すがたになって、サンドレスをかぶりはじめている。わたしもいちばん気に入った水玉のワンピースをはやく着てみたくて、コートを脱いだところでハツとした。Tシャツ、ブラウス、スカート、ワンピース……どれもみんな、きつかり二枚ずつのおそろいなのだ。ちがうものといえば、帽子に巻いてあるリボンの色だけ！

「どうしたのハッチ、着ないの？」

ワンピースのえりぐりから頭を出したマールウがふしぎそうに言う。サンドレスを着たママは、銀色のサンダルを履いて、手にはビーズのバッグ

を持って、姿見のまえに立ってあちこち点検している。

「マールウ、これ、みんなおそろいだよ」

① わたしが声をひそめて言う、マールウは「うん、まあ……」とちよつとB 床に広がる洋服を見下ろした。

「どうしたのハッチ、気に入らないの？」

鏡のまえでレモン色の傘をクルクルまわしながら、ママが聞く。顔には茶色のサングラスまでかけている。まだ部屋のなかにはストーブががらんキイテいるのに、春を飛びこして一気に夏が来たみたいだ。

「気に入らないわけじゃないんだけど……ううん、すつごく気に入ってるんだけど……」

「じゃあなによ、サイズまちがってた？」

「ううん、たぶんまちがってないと思う」

それは目のまえのマールウを見ればあきらかだ。水玉のワンピースは、色もかたちも、とてもしっくりマールウのからだになじんでいる。

③ 「ハッチ、やつぱり気に入ってるの？」

マールウは心配そうに聞くけど、視線はちらちら麦わら帽子のほうに向いている。わたしのことより、あの帽子をはやくかぶってみたくてしかたないんだ！

「なによ、ハッチ、どうしたの？」

ママが傘を畳んでどすんとまえにすわったので、わたしはしかたなく口を開いた。

「今日友だちに言われたの。ふたりともいつもおそろいの服着て、イヤにならないの？ つて。その子のイトコもふたごだけど、そのふたごの子たちは、おそろいの服なんか着ないつて。その子たちには、個性があるからって」

「へーえ。で、ハッチはなんて言いかえたの？」

「なんにも……」

「あの、その子、岩倉みほちゃんというんだけど、背が高くて、おとなっぽい子だよ。べつに、いじめっ子とかじゃないんだよ」

隣からつけたしてくれたマールウの頭には、いきなり麦わら帽子が載っている。思っていたとおり、水色のリボンのついているほうを選んだから、わたしの帽子のリボンは白だ。

「へーえ、個性ねえ。その子、おもしろいことを言うわねえ」

「ママ、マールウとわたしがおそろいの服を着てたら、個性つて、できてこないのかな」

「あんたたち、個性がほしいの？」

「そうだよ、ねえママ、個性つて、どうやってつくるの？」

④ 「個性はつくるものではありません！」

ぽかんとしていると、ママはコホンと咳をして続けた。
「たとえばね、ここに、アリのさんのAさんとBさんがいます。ちっちゃいから、わたしたちにはどっちもおんなじに見えるよね。でも虫めがねを使えば、もつとよく見える。でもよく見えたところで、ふだんアリののことをよく知らないわたしたちからしたら、きつとどっちもまだ同じに見えるよね」

うんうん、わたしたちはうなずく。

「ただ、ふだんアリのさんのことをよく勉強してる昆虫学の偉い先生が見たら、きつとAさんとBさんのあいだには、ぜんぜんちがう特徴が見えるんだと思う。どっちも同じとはぜつたに言えないくらい、はつきりとしたちがいがね。ま、個性なんてそんなものよ」

ムム、わたしたちは腕を組んでうなる。

「ママだって、いまテレビに出てる若いアイドルの顔はみんな同じに見えるけど、あんたたちからしたら、きつとぜんぜんちがうでしょう。関心のないひとからしたら、どっちも同じに見えるけど、一度関心を持つてながめたら、個性というのは、ちゃんと見つけられるものなのよ。そうそう、だから個性というのは、自分でつくったり見つけたすものじゃなくて、よその他人から見つけだされるものだってこと！ だからそれが見つけだされるまでは、自然にふつうに、してればいいの！ そもそも、そんなの見つけだされたところで、本人にとつてはあつそうですか、勝手に言つて、フーン、で終わりよ。だってアリが自分の個性について、うだうだ考えてたりすると思う？」

「でもママ、わたしたち、アリじゃなくて人間だもん……」

⑥ 「じゃあアリを見習いなさい。アリの個性はわたしたちにはわからないけど、アリはアリで立派に生きてるじゃないの」

「うーん、でもいちおう、人間として、個性、つくらなくていいのかなあ……だってみほちゃんのイトコは……」

「つくった個性なんて、どのみちつまらない個性よ。そのみほちゃんのイトコやらだって、実際にみてみたらその子たちのことを好きじゃなければ、たいしたちがいないって見つけられないわよ。要は、関心があるかどうか！ だから気にしない！ それよりほらほら、着てみなさいよ」

⑦ ママがせきたてるので、わたしも水色のワンピースを着て、麦わら帽子をかぶつてマールウと鏡のまえに立った。

「うっわー、さすがわたし！ ふたりともよく似合ってる！ 我ながら、なんてかわいいふたごを産んじやっただらうー！」

ママは大きく腕を広げると、マールウとわたしをぎゅーっと抱きしめて、それからまたサンドレスを脱いで、今度はブラウスとスカートの試着

にとりかかった。

鏡のまえに取り残されたわたしたちは、ほかのひとからしてみたら、たぶん帽子のリボンの色と、顔のほくろの位置でしか、見分けられないだろう。ママはみほちゃんが言ってた個性なんて気にするなっていうけど……でもやっぱりわたしはいまどうしても、個性というものをつくってみたいのだ！

「ねえマールウ、このワンピースはこのワンピースですてきなんだけどさ……」

……

「うん、なあに？」マールウはまだ鏡の自分にうつとりみとれている。

「ちよつと、工夫をしてみない？」

「工夫って？ どんな？」

「この帽子のリボンみたいだね、わたしたちそれぞれの個性をアピールするの。マールウとわたしはほとんど同じだけど、やっぱりちがう人間なんだから、そのちがいをもつと目立たせて、もつと見分けがつくようにしたほうがいいと思うんだ」

「えー、そうかなあ」

「そうだよ。これは、ふたこの制服を脱ぐ最初の一步だよ」

「えーっ、中学生になったらどうせ制服着るのに？ するとじゃあハッチ、わたしたちもこれからは、ほかの子みたいに自分ひとりだけが着る服を着るってこと？」

「すぐじゃないけど、ゆくゆくはそうだよ」

「うーん、わたし、そんなのできるかなあ……だって、こういう服ってひとりよりふたりで着たほうがかわいいし……」

「だめだめ、そんなこと言ったら、いつまでも一人前の大人になれないよ。まずは、ちよつとずつちがう、から始めるの！」

「でしょ？ じゃあ、作業開始！」

それからわたしたちは、新しいシャツにもスカートにもバッグにも、自分の好きなものをどんどん縫いこんでいった。いろいろくつつけすぎてできあがりがいまいちなものもあったけど、縫えば縫うほど、ゴタゴタすればゴタゴタするほど、マールウとちがえばちがうほど、これを持っているひとの趣味とか好みとかがはつきり目に見えてうきあがってくる感じがして、うん、これがたぶん、わたしの個性というやつなのだ！

（青山七恵『ハッチとマールウ』）

鏡のまえにマールウを残して、わたしは物置部屋からママの裁縫セットと、ママがむかし集めてたきれいな布とか包装紙とか、とれちゃったかわいいボタンがいつしよくたにしまわれている藤の箱を抱えて戻ってきた。

「あらどうしたの、そんなの持ちだして」

新品のブラウスを着たママが、鏡のまえで口紅を引きながら横目で見る。マールウはもうワンピースを脱いでいて、ギンガムチェックのブラウスにデニムのスカートすがたで、ママに占領されている鏡のすきまで自分の格好を眺めている。

「ママ、わたしはこれで、自分の個性を出していきます」

「ハッチってば、やあねえさつきから個性個性って。熱でもあるの？ でもいいわ、好きにやりなさい」

それきり、ママはまたひとりファッションショーに没頭しはじめた。わたしはいそいで着ていたワンピースを脱いで、セーターとスカートのふだんの格好に戻ると、藤の箱をまえに作戦をネルことにした。

「あつ、このレースかわいい！」

隣からマールウが腕を伸ばしてきて、レースの切れ端を手取る。

「ほんとだ。じゃあマールウ、そのレースをワンピースのえりのところにくつつけてみたら？」

「⑪ そうだね、じゃあこれ、半分に切るね」

「ダメダメ、切らなくていいの！ わたしのぶんはいいの、これはぜんぶマールウが使ったってば」

「え、そうなの？ じゃあハッチはどうするの？」

「うーん、わたしは……あ、これ、このくるみボタンを、えりにつけてみようかな」

「そっかあ、それもかわいいね」

問一 [A] に入る言葉を文中から二字で抜き出さない。

問二 — 線①「わたしが声をひそめて言う」の心情の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア、ママが買ってくれた服が気に入らず不満をおさえられない
イ、ママが選んでくれた服が自分の好みどおりで興奮している
ウ、ママが買ってくれたおそろいの服に疑問を感じている
エ、ママが服を大量に買ってくれたことに対し申し訳なく思う

問三 [B] に入る最も適切な言葉を選びなさい。

ア、きまりわるそうに イ、はずかしそうに
ウ、ふしぎそうに エ、もうしわけなさそうに

問四 — 線②「キイテ」・⑩「ネル」を漢字に直さない。ただし、送りながが必要な場合はひらがなで書きなさい。

問五 — 線③「やっぱり気にしてるの？」とあるが、ハッチが「気にしている内容」を二十六字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六 — 線④「個性って、どうやってつくるの？」・⑤「個性なんてそんなものよ」からハッチとママの個性のとらえかたの説明として最も適切なものを選びなさい。

- ア、ハッチは個性を見つけるには同じ服を着ないことが必要だと考えているが、ママは他人に関心があるかないかという気持ちが個性をつくるものだと考えている。
- イ、ハッチは個性というものは周りの人が自然に見つけてくれるものだと考え、ママはそれぞれの個性をみんなが見分けられるように、自分たちがつくるものだと考えている。
- ウ、ハッチは周りの人のために個性をつくるものだと考えているが、ママは個性というものは自分自身のために、積極的につくらなければならぬものだと考えている。
- エ、ハッチは他者と区別するために個性をつくるものだと考え、ママは個性について自分が意識しなくても周りの人が見つけるような、自然に出来るものだと考えている。

問七 — 線⑥「じゃあアリを見習いなさい。」の説明として最も適切なものを選びなさい。

- ア、アリのように本能に従って無心に生きるべきだということ
- イ、アリと同様に外見で区別できる個性は必要ないということ
- ウ、アリを見習い個性をおさえて生きるほうがいいということ
- エ、アリから他人の目を意識しない生き方を学ぼうということ

問十一 — 線⑪「そうだね、じゃあこれ、半分に切るね」に込められたマールウの心情の説明として最も適切なものを選びなさい。

- ア、二人で同じものをつけるのが当然だと思っている
- イ、ハッチもレースをほしがっていると思っている
- ウ、自分一人でレースを使つてはハッチに悪いと思っている
- エ、レースを一度に全部使わず大切に使うと思っている

問十二 本文の内容として最も適切なものを選びなさい。

- ア、ママは、個性はつくるものだと言ひ張るハッチとマールウにあきれるものの、これも個性を見つける最初の一步だとほえましく思い、しばらく二人を見守ることにした。
- イ、マールウは、ふたりでおそろいの服を着ていたとしても、個性やかわいさはそれぞれがつてくるものだ気づいてしまったが、ハッチの勢いの前ではそのことを言えないでいた。
- ウ、ハッチは、おそろいの服を着ていると個性はできてこないと思つているが、今はおそろいの服しか持っていないのでそれを加工して個性をつくり出そうとした。
- エ、ハッチとマールウは、大人っぽい岩倉みちゃんに子供っぽい自分たちを否定されたことに腹を立て、自分たちの力で大人になつて彼女を見返そうと自分たちが考える大人への準備を始めた。

問八 — 線⑦「せきたてる」の使い方として正しいものを一つ選びなさい。

- ア、私はせきたてられる恐怖に映画を見続けることができなくなった
- イ、私は時間にせきたてられるようにお弁当を急いで食べた
- ウ、私は以前貸した本を返してもらうように友人をせきたてた
- エ、私は父をせきたててデイズニールランドに連れて行ってもらった

問九 — 線⑧「アピールする」の文中での意味として最も適切なものを選びなさい。

- ア、主張する
- イ、誇張する
- ウ、自制する
- エ、自慢する

問十 — 線⑨「これは、ふたこの制服を脱ぐ最初の一步だよ」とは具体的にどうすることか、最も適切なものを選びなさい。

- ア、ママにそれぞれが似合う服を選んでもらうことで、ふたごが同じ服を着ない状態にすること。
- イ、自分の似合う服を見つけ加工することで、ふたごでおそろいの服を着ないようにすること。
- ウ、それぞれがちがう服を着ることで、ふたこのちがいを誰が見てもわかるようにすること。
- エ、おそろいの服に工夫を加えることで、ふたこのちがいを目立たせるようにすること。

平成三十年度国語解答用紙

受験番号
氏名

(注意) ※印の所には記入しないこと

合計	※
----	---

一		
問六	問五	問一
	1 カタカナ	
問七		問二
問八		2 ひらがな
問九		問三
問十		問四
		(ア)
	3 漢数字	(イ)

※

二				
問八	問七		問六	問一
最初	⑧	⑦	⑤	
				問二
				問三
				A
				B
				問四
問九				問五

※

三			
問六	問五	問一	
	最初		
問七			
		問二	
問八			
		問三	
問九			
		問四	
問十		②	
問十一			
		⑩	
問十二			

※
